



題字 和泉 哲章

NO. 1 令和3年12月14日(火)
発行 新潟県NIE推進協議会事務局

コロナ時代の新聞と NIE

新潟県NIE推進協議会 会長 伊藤 充

2020年4月16日、全国の新聞社も学校も激しい変化を迫られた。新型コロナウイルス緊急事態宣言の全国への拡大である。新聞社では出社制限が掛かり、現地取材も困難になった。リモート取材が常態化し、記者たちはもどかしさをパソコンキーにぶつけた。学校は完全休校となり、教師たちは子どもの自習のための教材準備や健康把握に追われた。

全国の緊急事態宣言が解かれると、対面の機会は増えたものの、新聞社も学校もソーシャルディスタンスの確保、対話時間の制限、人数制限、消毒の徹底など一層きめ細かな対応を求められた。このような危機的とも言える状況においても、新聞はいつものように家庭に配達された。学校は宣言前のように、子どもの笑顔であふれた。そして、NIE実践研究委嘱校では、新聞を使った授業が粛々と続けられていた。昨年度、6つの学校でNIE研究会が計画されていたが、すべての学校が開催方法を工夫し、総力を結集して見事な研究成果を発信した。頭が下がる思いである。

思えば、2021年は新型コロナに関係する多くの誤った情報が大々的にSNSで拡散し、人々の心を惑わそうとした1年であったように思われる。そんな中で一つの調査結果が発表された。メディア情報の信頼度調査(日本新聞協会広告委員会)である。信頼度1位は新聞社で56.5%、2位はテレビ局で48.9%、3位は雑誌社で20%、4位はウェブ媒体で16.6%。偽りの情報が飛び交う時代、人々は真実を指し示す方法を強く再認識したようである。そして、フェイクニュースがあふれる時代だからこそ、様々な事象を検討し真実にたどり着こうとするNIEの授業もまた一層輝くのである。

どのような不幸な経験であっても、何一つ無駄にすべきではないと思う。新型コロナウイルスの経験から、私たちはどんな未来の光を発見するのであろうか。



第26回NIE全国大会オンライン(札幌) 本県参加者の声

新潟第一高等学校(実践研究委嘱校) 若林 美恵子教諭



既知の単語から好みの情報を手繰り寄せるのに特化したスマートフォンと違った良さが新聞にはある。新聞は未知の宝庫だ。こんな時代だからこそ、風に吹かれながら街を眺め旅するように記事を読んでほしいし、こんな時代でも、希望を持って今日を生きる市井の人々がいることを知っておいてほしい。

大会では、校種を問わず、子どもたちの生き生きとした様子が印象的だった。新聞を通じて、社会の一端を知り、気づきを得られたことが、新たな学びや喜びへとつながっていくのだ。

いよいよ本校でも今秋からNIEが始まる。未知の世界の扉を広げ、あふれる情報から、問題の本質を見極め、新しい視点を得、いつか羽ばたけるその日まで、力を蓄えるヒントにしてほしいと願っている。

第 28 回 NIE 新聞記事感想文コンクール 大賞は米山楓花さん（長岡希望が丘小 2 年）



10 月 22 日（金）、長岡市立希望が丘小学校（丸田俊一校長）と新潟市立浜浦小学校（齋藤純一校長）で、第 28 回新聞記事感想文コンクールの表彰が行われた。大賞に輝いた米山楓花さん（希望が丘小：2 年）＝写真左＝には伊藤会長から賞状が、新潟日報社読者局石垣局長からは盾と記念品が手渡された。米山さんは、「大賞を受賞してびっくりしました。新聞記事を読んで知らない世界のことが分かりました。」と話した。

会長賞の横木悠吾くん（浜浦小：5 年）は「記事をよんで、1 週間くらいかけて作文を仕上げました」と苦労を話した。その他、読売新聞社賞（富田智晃支局長）や佳作の入選者が表彰され、齋藤校長には団体賞が贈られた。

今年度は県内の小中、高校から 37 校、応募数 1377 編が集まった。2 次審査を通過した 25 編を新聞各社の審査員が慎重に審議をして大賞や会長賞などの各賞を決定した。審査員からは「子どもの鋭い感性と素直な論述が心に響いた」といった声が聞かれた。

NIE 研究会「キャリア教育」始まる（上越市立三和中学校）



11 月 11 日（木）上越市立三和中学校（石野秋広校長）で、令和 3 年度初の NIE 研究会「第 2 学年：総合的な学習の時間」が開催された。指導は鈴木克典校長（上越市立直江津中学校）と、山之内朋子 N I E アドバイザー（柏崎市立柏崎小学校）が務めた。

授業で生徒は、医療や運輸、農業など様々な職業に関する新聞記事から現状を把握し、職業の未来の姿についてグループで意見交換を行った。著しい技術革新の中で、どんな力を身に付ければいいのか、生徒は将来の自分の姿を重ね合わせて考えを深めていった。（授業者：西方愛祐美教諭、板垣裕也教諭）

< 編集後記 >

「コロナ禍においても研修を止めない」、実践研究委嘱校の取り組みは、未来を切り拓く本県の子供たちのために努力を惜しまない教職員の姿そのものであり、それは本県 N I E が全国的に高い評価を得ている所以である。授業に生き生きと取り組む姿から、教師と子どもの温かい関係性や新聞の力を感じている。感謝しかない。

GIGA スクール構想の下、学校現場では ICT の活用が始まった。子供たちは iPad を文房具として自在に使っている。こうした変化を受け止め、それにふさわしい N I E の実践を積み上げ、子供たちの力を高めていく必要がある。そのためには、こういった条件整備が必要なのか、熟議を重ねて可能な所から進めていきたい。（津野庄一郎）

Check ! 新潟県 N I E 推進協議会ホームページ「お知らせ」で各校の取り組みを紹介